Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS
Vol.6

Contents

1 —— 巻頭言
2 —— FD調査報告
5 —— FDへの取り組み（第６回）
FDのための必読書 －6
6 —— INFORMATION

巻　頭　言

初年次教育と科目間連携 ―地方キャンパスからの提言

海洋生命科学部教授　加戸隆介

大学全入時代を迎えて，大学はこれまで以上に学力レベルの異なる多様な学生を受け入れざるを得なくなった。これにともない，私たち教員は入学してきた学生にどれだけ付加価値を付けて社会に送り出すかが今まで以上に問われることになってきた。いわゆる学士力の保証である。学士力は各大学で自ら設定するものであろうが，社会が期待するレベルは時代に応じてある程度決まっているように思われる。しかし，学力レベルの多様化により，大学や教員が求める学力レベルと教育をうける学生の能力に開きがおおきくなりつつある今日，私たちはどのように学生を期待するレベルまで引き上げればよいのであろうか。

初年次教育は，受け入れた多様な学生に対して，これからの４年間またはそれ以上の過ごし方を考えさせる上で，極めて重要な意味をもっているといえよう。とりわけ，北里大学はキャンパスが広域に散在しており，地方に展開する学部の情報や学部教員との接触が同じキャンパスで展開される学部の学生に比べて限られるために，専門教育への不安や認識の甘さが進級後に問題を生じさせることにもなっている。現在，高等教育開発センターとの連携の下，一般教育部において再来年度の本格実施に向けて試行されようとしている「初年次教育演習」は，入学生が大学で学ぶ姿勢や心構えの他，ノートの取り方，文章表現法，レポートの書き方，発表の仕方など基本的かつ重要な内容が盛り込まれていることから，私たち専門課程担当教員はとりわけ大きい期待を込めてこの試みの成果を見守りたい。

一方，既存の理系の教育科目についてはどうであろうか。ある大学では数学，化学，生物などの基礎力不足を補うために，高校レベルの内容を基礎科目としてこれらを必修単位化している例もあるときく。本学部では，これらを要習科目として設定しているが，自由選択科目であり，卒業単位数には含まれない。基礎が理解できていれば履修の必要はないが，進級してきた学生の中には，基本的な事柄がおろそかになっている場合も見られる。こうした学生と教員の不幸を無くすためにもⅠ，Ⅱ群科目間での連携は重要な問題である。その点では，一般教育部教員と学部教員はこれまで互いの立場を尊重する余り，互いの教育内容を協議するなどの連携が少なかったのではなかろうか。これは，教育の質を高め，学生の確実な成長を保証するという点からも高等教育開発センターに協力を仰ぎながら，今後改善を進めるべき事項であるように思われる。広域に展開する本学の場合，距離的問題が解消できない現状では，IT化による距離の隔たりの克服が急務である。例えば，遠隔地配信システムの完備はその解消に一役果たすばかりでなく，各学部で実施される特別講演やイベントを全学的に中継・配信することにより，情報を共有することが期待される。これらは各地に学ぶ北里学生の連帯感を醸成するのにも役立つ。また，遠隔地間での先輩後輩や学生同士のコミュニケーション形成にも役立つことも期待できる。この例に挙げたように，高等教育開発センターには全学的見地に立った教育システムの改善やハード面での充実への取り組みに大いに期待したい。これらの課題が克服されたとき，北里大学は名実ともに“生命科学の総合大学”となるのではないだろうか。

FDアンケート調査結果報告

高等教育開発センターでは，各学部と一般教育部（8組織）におけるFDの現状と課題についての基礎的な情報収集を目的とした調査を実施しました。調査結果は，本学のFD活動の向上と改善に役立てたいと思います。ここではその概略を報告いたします。

FD推進母体

初めに，FDの推進母体について尋ねた。常設のFD委員会が4組織（薬，海，看，一），常設の自己点検評価委員会が2組織（獣，理），常設の教育委員会が1学部（医），非常設の教員研修実行委員会が1学部（医衛）であった。名称はともかく，大多数の組織が常設の委員会でFD活動を行っていることが分かった。メンバーはどの組織も教員のみで，事務職員は事務関係全般に関与してるが，事務職員をメンバーとしている組織はなかった。

学生による授業評価について

学生による授業評価は，すべての組織で実施されており，時期としては最終授業の前後に集中している。ただし獣医学部では，学期半ばと終了時に2回実施している。授業半ばでの実施は，フィードバックが素早く行える利点があってのことと思われる。また，実施対象としては，専任・兼担（または兼任）に限られている組織が3（医，海，一），非常勤講師をも含む組織が5（薬，獣，看，理，医衛）となっている。

評価項目としては以下の8項目を挙げて選択してもらった。1）学生の授業参加の姿勢，2）理解度，3）学習への動機づけ，4）教員の授業技術，5）教材・教具について，6）双方向性重視，7）シラバスの適切性，8）総合的満足度。そのうち，薬学部ではすべての項目を，獣医学部は1～5，医学部3～5と8，看護学部1～3，5～7，理学部1～6，医療衛生学部4～8，海洋生命科学部6～8，一般教育部1～6，8というように，項目を少数に厳選する学部と網羅的に採用する学部とかなりのばらつきがみられた。

また，結果の公表については，ホームページや掲示を通して学生が閲覧できるのは，看護学部，海洋生命科学部，一般教育部の3組織であった。他の学部では教員個人のみとか，教授会などでの報告となっている。さらに，授業評価の効果についての質問では，教員の自己改善に役立てるという答えが多く，看護学部のように個人単位ではなく，科目単位で実施している場合は，自由記述欄を重視し，当該科目担当者間で回覧し，情報の共有に努めているところもある。

授業参観について

授業参観を制度的に実施している組織は看護学部と一般教育部で，他の組織は制度的な実施はせず，現在のところその予定もない。看護学部では一部を除き，ほぼすべての授業を参観対象とし，参観後は報告書の提出を義務づけている。一般教育部では，授業公開を行う教員を募り，参観者は報告書を提出することになっている。また，相互授業評価については，全学部が実施していない。その理由は，「まず目的を見定めてから」（獣），「特にその必要はない」（理）などとなっている。また，今後実施を検討するつもりの組織は，薬学部と看護学部で，他の組織では実施を検討していない。一般教育部のように，「FD活動と相互授業評価は馴染まないと考えている」というケースもある。

研修会・講演会について

研修会や講演会は，どの組織でも最低年1回，半数の組織で年2回開催されている。過去3年間のテーマを質問したが，そのテーマは多岐にわたっている。その組織の事情に即したテーマが多く，「医学生のキャリアデザイン・早期体験学習」（医），「動物実験倫理指針と運用の実際」（獣），「獣医での6年生移行に当たっての体験」（薬），「理学部の傾向と2009年度入試に向けて」（理）などがある。また，授業改善をテーマとしているものには，「授業改善の取り組み ―いま，日本の大学に何が求められているか」（獣），「守礼敬人教育とプロフェッショナリズム教育の推進・教育技法のスキルアップ」（医），「学生気質をふまえて教育法を考える」（医衛），「共同学習ワークショップ ―学生の変化・成長を求めて」（一）などがある。さらに，初年次教育に関するテーマ（獣，一）もある。注目すべきは，学生のメンタル面を考えるテーマで，「学生からカウンセラーへの（メンタルを中心とした）相談の実態と学部教員の学生への対応について」（看）というような，今後の大きな課題となりそうなテーマも見られた。

一方こうした研修会・講演会の効果についてであるが，「熱心に討議することにより，共通の問題意識を共有する」（理），「自らの教育力や技術向上に役立てるほか，学部全体として抱える問題点などに対するディスカッションの場として役立っている」（海）と，概ね自己評価は高い。

教育成果評価について

教育の成果を評価するために，どのような調査を取り入れているかという質問では，薬学部は在籍学生や卒業生に対するアンケートを継続的に実施し，獣医学部動物資源科学科と海洋生命科学部では，

卒業生に加え，卒後教育委員会での調査を行っている。看護学部では在籍者アンケートを，理学部では卒業者アンケートをそれぞれ行い，他の組織では実施されていない。

また，その調査結果の活用では，薬学部や理学部ではアンケート結果を関連する委員会で討議し，獣医学部動物資源科学科や看護学部ではカリキュラム改善に用いている。

FD の現状認識について

「FD が教育力の向上や学生の学力向上に不可欠なものとして認識している。授業評価や学生アンケートなどを実施するとともに，組織的にカリキュラム改定，シラバスの充実，授業の改善等に取り組んでおり，成果も上がっている」（看，海，医衛，理），「近年，FD を教育力の向上や学生の学力向上に必要なものと認識し，授業評価や学生アンケートなどを実施するとともに，組織的にカリキュラム改定，シラバスの充実，授業の改善等に取り組んでいる。取り組みの進行状況はばらつきがあるものの成果は上がっている」（薬，獣），「FD の重要性は認識されつつあり，授業評価も実施している。また，取り組みの進行状況にはばらつきがあるもの半数以上の教員がシラバスの充実，授業の改善等に取り組みつつある」（医，一）という選択肢をそれぞれ選んでいる。

また，それぞれを選んだ理由として，「組織的なカリキュラム改定やシラバスの充実に関しては，未だ十分な成果は上がっていない」（薬），「とくに生物環境科学科における JABEE プログラムでの改善目標の設定，教育の改善につながっている」（獣），「5 年次の臨床実習，6 年次の選択実習のあり方，実施内容に変化が見られるようになった。総合試験（客観式試験）の問題作成に対する取り組みが変わった」（医），「現在，看護学部教育は，新カリキュラムと旧カリキュラムが同時に進行する移行期にあるが，移行期特有の教員配置の困難さや，授業内容の重複など様々な問題をクリアーしつつ，逆にそれらが同時進行することから，新カリキュラムをより改善する新しい発想や工夫が抽出されている。このような改善に対する積極的な姿勢が，教員の中に芽生えていることは，紛れもなく新カリキュラム構築に向けて回を重ねた FD 研修会の成果といえる」（看），「教員の全員参加で，有意義な FD を毎年開催し，教育の向上に熱心に取り組んでいる」（理），「本学部の教育委員会は組織を挙げて，教育の充実に資するあらゆる取り組み（授業評価，学生アンケート，カリキュラム改定，シラバスの充実・授業改善）を模索し実施している。その背景には FD が教員の教育力の向上と学生の学力・学習能力向上に必須であるとの全教員間での共通の認識がある」（医衛），「それが学生に対する教員の義務，大学としての責任と考えているため」（海），「FD に関しては，まだ一般教育部教員全体の意識に定着しているとはいえないように思う。しかし，近年着実に FD への関心はたかまり，大学教育にとって必須のことと考える教員が大多数になりつつある。その結果，シラバスや授業改善に取り組む姿勢にも積極性が出てきたように思う」（一）となっている。

センターへの期待

センターに対する期待を聞くため，10 の選択肢を示したが，そのうち複数の組織が回答しているものを挙げると，「他大学で行われている先進的な教育内容・方法について知りたい」（獣，医，理，医衛），「教育改善に役立つ FD セミナーやシンポジウム，ワークショップを実施してほしい」（海，一），「他大学の優れた取り組みや，大学改革に関わる最新の情報を提供してほしい」（獣，医，医衛，一）「学生の基礎学力不足や学習意欲の低下を補う方策について検討してほしい」（医，海，看，理，一），「情報技術を活用した新しい授業方法について紹介してほしい」（薬，看，理）であった。教授法向上のための研修や授業の悩みに対する相談窓口の設置，授業評価を授業改善に活用する方法については，いずれの組織もセンターに対する期待には上がっていなかった。

FD の連携について

積極的に考えているのは，「積極的に進めていきたい」2 組織（薬，一），「先方から連携を求められれば検討してもよい」1 学部（医）で，他の学部は，「現段階でその必要はない」となっている。選択理由としては，「高等教育開発センターの役割に占める 1 年次教育の割合は高いと感じるから」（一）が積極的な連携希望理由として上がっているのに対して，「学部内の FD 活動に対し，より具体的な対応が必要であると考えるため，現状では連携までの段階には至っていないと思われるため」（獣），「医学教育の特殊性から，安易に進められる課題ではないので」（医），「他学部との連携は，同時にいくつものテーマで行うのは得策ではないと考える。今はチーム医療・医療実習環境などで学部間連携は十分ではないか。これ以上教員に全学の問題で時間を割かせては所属学部での本来の業務（教育・研究）に支障がでてくる。全学の問題に目を配っている組織は他にもあるわけです」（医衛），「学部毎に抱える問題が異なると判断されるため。ただし，情報提供は是非お願いしたい」（海）と，各組織の特殊性を考慮して

の判断と考えられる。

全学教員研修会について

センターが実施している，新任教員研修会や在職教員を対象とする研修会の意義などへの質問に対して，「新任教員については，FDの意義をよく理解し，今後，各部署でFD活動に積極的に取り組んでもらうために，着任時に全学での研修会に参加してもらうことは有意義であると思われる。また，FD活動は，教員だけの取組でうまくいくものではないと考えられる。センターには，staff development（SD）にも取り組んでいただきたい。職員の場合は人事異動があるため，全学で行う意義があると考えられる」（薬），「北里大学における教育のあり方，理念を共有することを目標におくべきと思われる。一般企業の新人研修のようなものは，不必要と思う（名刺の渡し方など）」（理），「センターは，各学部の教員研修会で手に余る全学が関与する問題や他学部での取り組みを参考にしたい状況がはっきりしてきた段階で，全学的規模の研修会を開催したり，学部とセンターの共催による研修会を企画するのはいかがですか。今の時点での全学的規模の研修会の開催は同じ趣向のものをダブって行っていることになっているように思われます」（医衛），「人事部が関与する意味がよく分からない。人事部とは独立して研修会を実施するのが望ましい。現行の研修会の内容を詳しく知らない。参加者からのフィードバックは得ているのでしょうか？」（海），「研修会は，FD活動の一環として行われることが重要である。そのため，人事部との共催はやや役割を曖昧にしてしまうのではないか。新任教員研修会とFD研修会は，高等教育開発センターが単独で主催し，FDのためにのみ行う方がよいと思う」（一）とあり，その他の2学部からは回答が得られなかった。

センター講演会等への要望について

現在年1～2回行っているセンター講演会に対する要望としては，「全部局にとって参考になると思われるFD活動の例などを紹介する講演会やセミナーを企画していただきたい」（薬），「キャンパスが分散する大学として一体感を高める方策」（海），「相模原地区の高等学校との連携。本学の教育を高校に知ってもらう役割もあり，それが近隣高校からの志願者を増やす力となるとともに，大学にとっても大きな刺激となるように思う」（一）と要望について回答があったのは3組織のみであった。

共通授業アンケートについて

平成20年度後期に実施した，高等教育開発センターで作成した授業評価アンケート（「授業の振り返りシート」）の採用については，積極的なのは一般教育部のみで，他の組織は，「現在独自に実施しているアンケートが最良」（海），「アンケートの共通化は難しい」（医）など，多くの学部が採用に消極的であった。

初年次教育取り組みについて

センターでは一般教育部と連携して平成21年度より，いわゆる生徒から学生への円滑な移行を支援するための一環として，学習技能の習得を目的とした初年次教育を「教養演習」科目を利用して実施する。これに関連して，こうした初年次教育の取り組みを現在行っている学部に，その取り組みの内容を紹介してもらった。「1年生で行われている科目には以下のような科目があり，学習意欲の向上や学習技能の向上に資する科目と考えている。1）『薬と仕事1』：6年制薬学教育において，学生の学習意欲を高めるために，卒業生の活躍する現場（病院薬剤部，薬局，製薬企業など）を体験する実習科目（早期体験実習，夏休み中6日間）。2）『情報リテラシー1』：学生全員にパソコンを供与し，基本操作を習得して，学習，研究，業務に活用できるようにするための講義ならびに演習科目（後期計2コマ）。3）『薬学概論』：薬学とは何かを把握してもらうため，各領域で活躍する方々にオムニバス形式で講義をしていただいている科目（前期1コマ）」（薬），「1年次に自由選択科目として『基礎科学演習（物理学・化学・生物学）』を開講している」（医），「来年度から必修科目として設置し取り組む予定です。内容は現在模索中です」（海）と，それぞれの対応が寄せられた。

その他に「教育力向上の取り組み事例」では，「守屋利佳准教授（医学教育研究部門）」（医）と「特色あるFDの取り組み」では，「平成19年度から開始した『新任教員に対するFD委員によるマンツーマン式の研修』は，特色あるFD活動の一つである」（看）が回答されているのみであった。

以上，今回のFDアンケート調査の概略を報告いたしました。各学部の独自性が色濃い本学の場合，どのようにFD連携と組織化を図り，情報を共有していくかが大きな課題です。今後のセンターにおける活動にこの結果を有効に生かすべく検討を重ねたいと思います。

（集計，文責：岡野安洋）

シリーズ　FDへの取り組み　第 6 回

医療衛生学部における教員教育研修会活動（FD）の現状

医療衛生学部 教員研修会実行委員長　佐治眞理

医療衛生学部において現在行われている実質的なFD活動は，「教員研修会」と「学生による授業評価」です。どちらの活動も教育委員会の活動の一環として毎年実施されております。「研修会」の実施については，教育委員会の作業部会として研修会実行委員会が毎年組織され，その年度のテーマ選定をはじめとするプログラムの企画と研修会の開催を担当しております。ここでは，学部FDの一環としての研修会活動の現状を紹介させていただきます。

過去6年間の教員研修会のテーマと実施方法の変遷を見てゆきますと，前半と後半とで教育に対する問題意識が大きく変化したようです。平成15年度，16年度，17年度の研修会は，少子化による大学間競争激化の問題やゆとり教育世代が入学する2006年問題を前にして如何に学部の教育体制を改革し対応するかに関するテーマのもとに全教員参加の形式で行われました。事前に抄録提出により全教員からテーマに沿った提案や意見を募り，研修会当日は，1）抄録集から選ばれた教員の基調テーマ発表，2）抄録内容により実行委員会が参加者を班分けして組織したグループ発表会と3）各グループ発表会で作成されたレジュメに基づき班代表が発表する全体討論会の3部からなるプログラムを実施しました。事前の抄録作成から研修会当日のグループ発表と全体討論でその内容を発展させる長い思考過程によって，1日研修会にもかかわらず“全教員が問題意識を共有する”という研修会の主目的は達成できたように思われます。しかし，全員が意見発表することに主眼を置いたこの実施方法は，教育専門家によるアドバイスや参加者間の意見交換やワークショップを通じて自身が抱える教育上の問題を解決したいと考える教員には不満の残るものであったようです。

平成19年度実行委員会において，数名の委員から期せずして，ここ数年間で入学した学生にどう対応していいか戸惑う場面に多く出会っており，学生気質が分からないと適切な教育，学生指導が行えないと感じるので，“学生気質をふまえた教育方法の模索”のようなテーマを取り上げてほしいとの提案がありました。この企画会議で，主テーマ「学生気質をふまえて教育方法を考える」と副テーマ「“知識を教える”から“学び方をコーチする”へのパラダイムシフトの具体化を探る」が決まり，このテーマで全教員が38名づつ分かれて3年間3回シリーズの研修会に参加することになりました。サブテーマとして4つのセッション：①現代の学生気質，②学生のキャリアデザイン，③模擬講義，④チュートリアル教育を設け，各セッションで発題，ワークショップ，討論をこなすというプログラムで，平成19年度に1泊2日合宿形式でシリーズ1回目研修会を行いました。4つのサブテーマと盛り沢山な課題が2日間でこなし切れるか危惧されましたが，企画側の問題意識と講師の問題提起の的確さが参加者の意欲を盛り上げた結果，かなり満足いくものとの評価を得ました。しかし反省点も指摘され，平成20年度には①現代の学生気質，②学生のキャリアデザインの2セッションを1つにまとめ，更に③模擬講義を予備校講師による模範講義に変更して，シリーズ2回目研修会を行いました。シリーズ2回目では，1回目好評であった④チュートリアル教育の評価が分かれ，また現代学生気質についての学内からの問題提起（事務，カウンセラー，学生指導委）が新鮮だったと好評でした。模範講義のセッションでは限られた板書と口述だけで聴衆を学習内容〈化学の電解質〉に引き込んでゆく予備校授業の見事さに授業の原点を見たと好評でしたが，これも評価は分かれました。今年度はシリーズ3回目が予定されています。

FDのための必読書――6

赤堀勝彦著
『効果的な講義・講演のすすめ方 ―眠くさせない話し方の技術』

保険毎日新聞社
1,260円（税別）

人前で話す仕事をしていると，自分の話をどうやって聴衆に分かり易く，また興味を持ってもらえるようにするかを知りたいと思うのは誰しもであろう。そうしたスキルを大変丁寧に解説してくれるのが本書である。本書は本来，講演会などでの講師を対象とした内容ではあるが，大学での講義にもおおいに参考になる。例えば，「話しの切り出し」（オープニング）では，謙虚さを示すあまりに言い訳がましくならず，落語の「まくら」のようにユーモアを含んだ工夫をすべきであるとか，マイクの持ち方や位置，視聴覚教材の使い方など，具体的に著者自らの経験に基づいた実践的なアドバイスが豊富に書かれている。

また，「良い講師・好ましくない講師とは」と題された最終章では，良い講師の条件とは，内容を絞って知らせる工夫をし，受講者の立場に立って，情熱を込めて話すこと，逆に好ましくない講師の条件は，話が早口でめりはりがなく，ハンドアウトのデータが古く，時間を守らないこととしている。学期はじめにさっと目を通して，自分の講義のチェックをするのも良いのではないだろうか。

INFORMATION

教員FD研修会について

平成20年12月22日（月），学生の教育に熱意をもって専念している教員の，自分の授業をさらによくしたい，自己発展的に授業法を体得したいといった要望に応えるとともに，グループワークを通して，組織的な教育力を図ることを目的とした研修会が開かれました。参加者は7学部および一般教育部の教員22名でした。

柴忠義学長・理事長の挨拶と，小林裕志人事担当常任理事による講話で研修会は始められ，次いで，本学海洋生命科学部奥村誠一准教授による研究授業，「私は水産遺伝育種学をこう教えている」が行われました。その後4グループに分かれて，「心に残る授業とは？」という課題でグループワークに取り組み，発表を行いました。

午後は山形大学高等教育研究企画センター長の小田隆治教授による，「授業をデザインする」という授業法開発演習が行われました。こちらも，小田先生のご指導の下，グループワークを中心に議論をし，各グループが本学の学生向けに展開したい授業をデザインしました。終わりには全体での討論も行われ，終了後には懇親会も催されました。こうした研修会の意義は，研修によって各教員が自らの授業改善に取り組む意欲を涵養することが一番ですが，併せて日頃顔を合わせることが少ない他学部の教員との共同作業を通じて，北里のアイデンティティーを養うことにもあります。

なお，この研修会における講演やグループワークの成果は「北里大学高等教育開発センター年報」に，昨年9月に開催した新任教員研修会の報告とともに掲載されています。

◆ センター員の活動

平成20年

・科学研究費補助金「学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究」研究会
11月22日，神戸：小島

・エデュケーショナル・ソリューション・シンポジューム2008
11月26日，東京：藤原

・初年次教育学会第1回大会
11月29日・30日，東京：鈴木（参加のみ），小島（ラウンドテーブル企画・指定討論）

・FDネットワーク“つばさ”シンポジウム及び学生FD会議
11月29日，山形：岡野

・2008年度大学教育学会課題研究集会
12月6日・7日，岡山：岡野，小島

・「FDプログラムの構築支援とFDerの能力開発に関する研究」研究会
12月20日・21日，松山：小島

・北里大学　在職教員研修会
12月22日，白金：鈴木，岡野，小島，古矢

・武蔵野大学・入学前教育「自己の探究Ⅰ」
12月24日・25日，東京：小島

平成21年

・玉川大学特色GPシンポジウム「学士課程教育と一年次教育の役割」
1月30日，東京：小島

・全国高等教育研究所等協議会設立大会
2月7日，広島：鈴木，古矢

・ムードル・ムート函館
2月15日・16日，函館：藤原，福田

・第14回FDフォーラム「学生が身につけるべき力とは何か
—個性ある学士課程教育の創造—」大学コンソーシアム京都
2月28日・3月1日，京都：岡野，小島，西垣，赤澤，江川，黒澤

・東京農工大学特色GPシンポジウム「興味と経験から学びを深化する基礎教育」
3月9日，東京：小島

・第2回関西地区FD連絡協議会主催公開研究会
「授業評価からFD評価へ」
3月19日，京都：鈴木，小島

・第15回大学教育研究フォーラム
3月20日・21日，京都：鈴木，岡野，小島

・科学研究費補助金「学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究」研究会
3月27日・28日，金沢：小島

・初年次教育授業検討会（1）～（5）
1月27日，2月3日，2月10日，2月17日，　2月24日，
相模原：初年次教育プロジェクトメンバー，および有志

編　集　後　記

前号（第5号）2頁～3頁下段の「アンケートより」の箇所で，手違いにより重複して記事が掲載されてしまいました。お詫び申し上げます。なお，正しくは本センターのホームページにアップされておりますので，そちらをご覧下さい。

また4月より，従来のセンター員が再任され，新たに一般教育部の江川徹教授，高橋勇准教授が，センター員としてメンバーに加わります。

（岡野）

北里大学高等教育開発センターニュース

Center for Development of Higher Education, Kitasato University NEWS

Vol.6

発行日　2009年3月31日
発　行　北里大学高等教育開発センター
〒228-8555 神奈川県相模原市北里1-15-1
FAX：042-778-9543
発行責任者　鈴木　牧彦
表紙絵：古矢　鉄矢

北里大学高等教育開発センターWebサイト
http://www.kitasato-u.ac.jp/cdhe/